

特集

全国よい仕事研究交流集会2016②

2月27日、28日に開催した「全国よい仕事研究交流集会2016」を4月号(281号)と本号の2回にわたり特集を組みました。

本号の特集のメインは20の分散会です。編集する過程で、紙幅の関係で紹介できないことも多くありましたが、これだけの規模でよい仕事について考えあえる機会はこの場以上にはないと編集した者として感じています。分散会348枚の感想文からも「よい仕事とは何か」を自らの現場にひきつけて考えた方が多くいました。

「よい仕事とは何か」については、今までの蓄積した学びとして原則に記載しています。しかし原則に書かれていることを教条的に学ぶのではなく、これを土台として実践の学びからブラッシュアップしていく過程こそが重要であると感じています。それが全国よい仕事研究交流集会で行われていることであり、実践を振り返り、意味づけ、展望を描くことで、「よい仕事」観を深めていくものではないでしょうか。だから『『よい仕事』観は固定的なものではなく、流動的なものである』と感じています。働く人が主体となり、出資・労働・経営する協同組合の原理と、働く人、地域の方々が主体となり、地域の課題を仕事おこしを通じて解決する協同労働の理念があるからこそ、「よい仕事」の答えは絶えず働く仲間の中にあり、協同労働で働く人自身の人間としての生き方や哲学ともつながりながら、「よい仕事」観をつくっていくものではないでしょうか。そしてその「よい仕事」観と協同労働の協同組合が社会にあり続ける意味をたえず問い続けることを通じて、個人の「よい仕事」観から、社会の「よい仕事」観に広げるものだと思います。

その意味では、協同総研として「よい仕事」のあり方を深める際に、実践者と研究者が共に「よい仕事とは何か」を求め続け、考え続ける場であるよい仕事研究交流集会を協同の発見誌に特集し続けることは、とても重要であると感じています。

当日の分散会では、実践を通じて「よい仕事」の意味や学び、今後の方向性について客観的に幅広い見識からご示唆いただいた39名のコメンテーターの方々がありました。また明治大学駿河台キャンパスを分散会会場としてお貸しいただくなど明治大学教授で協同総研副理事長の中川雄一郎先生には大変なご尽力をいただきました。そして本特集を作成するにあたり、ワーカーズコープで働く仲間が各分散会の報告をご寄稿いただきました。多くの方の力で集会が開催、成功し、協同の発見誌を発刊できることに、感謝申し上げます。

(協同総合研究所 事務局長 相良孝雄)